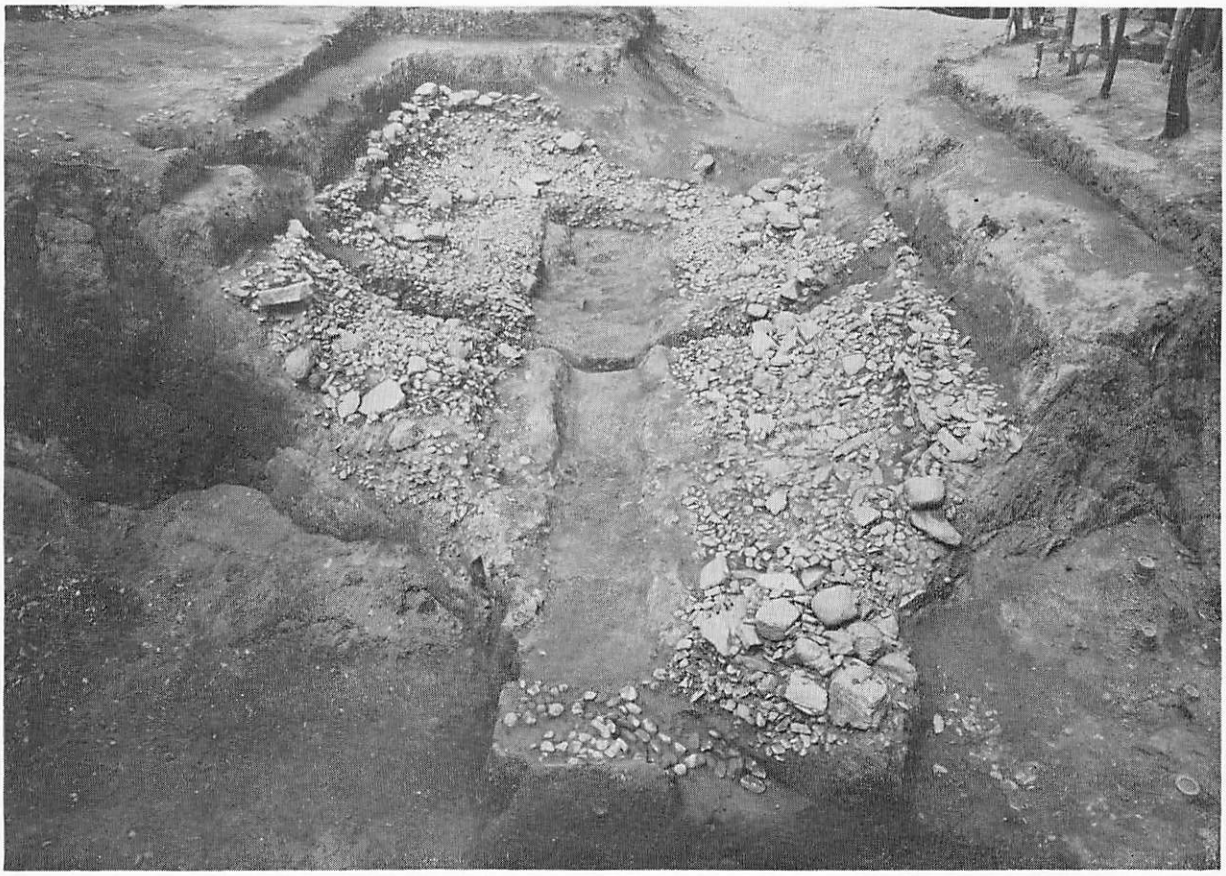
京都府相楽郡山城町

平尾城山古墳第1次発掘調査概報



平安博物館考古学第3研究室

昭和52年6月

1　はじめに

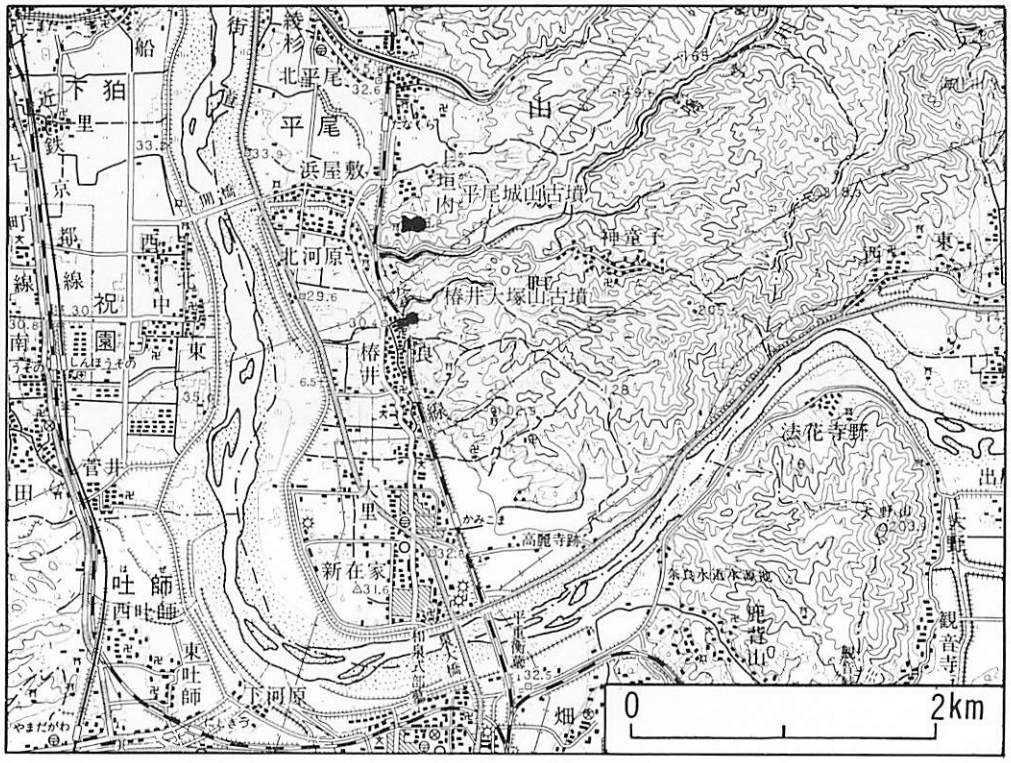
前期古墳の研究は，これまで多方面からなされてきた。現状をさらに一歩進める上で，一番重要なことは，まず特定の地域を限って，分布調査を含め，一基ずつ丁寧に調査を進めてゆくことであると考える。筆者はそういった観点に基づいて，かって向日丘陵の前期古墳の調査を企図したことがあった。[註①]

山城に於ける前期古墳のあり方をみると，おおまかにいくつかの群にグルーピングし得ると思うが，その中で重要でありながら最も調査の遅れているのが，椿井大塚山古墳を含む山城南部の地域であろう。

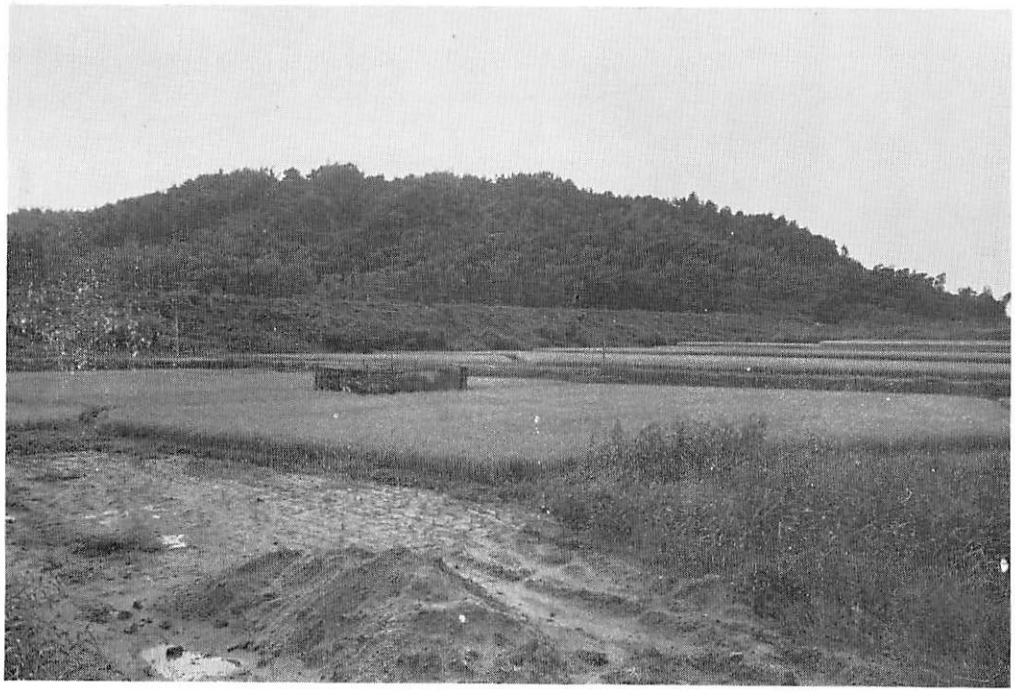
この地域に於ても，かって梅原末治博士らの精力的な調査により，かなりな部分まで古墳の内容等は明らかにされている。[註②]しかし当時の研究の動向を反映して，墳丘調査や遺構の充分な調査の実施されていないものが多い。

このような状況を踏まえて，先述した視点に基づき，まず今回，椿井大塚山古墳から至近の距離に所在する平尾城山古墳をとりあげ，第一次発掘調査を実施することにした。

調査に際しては，財団法人高梨学術奨励基金の援助を受け，また福島忠雄氏を始めとする土地所有者ならびに地元の方々，山城町教育委員会，京都府文化財保護課の多大の御協力を得



第1図　平尾城山古墳付近地形図



第２図　平尾城山古墳全景（北から）

た。あつくお礼申上げたい。　（近藤喬一）

註

① 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団『京都向日丘陵の前期古墳群の調査』（『史林』第54巻第６号，京都，1971年）

② 梅原末治『棚倉村平尾ノ古墳』（『京都府史蹟勝地調査会報告』３，京都，1922年）。『南山城の前方後円墳』（『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告』Ⅰ，京都，1972年）

2　発掘調査の経過

昭和51年度の平尾城山古墳の発掘調査は以下の日程で行なわれた。

８月20,21日　器材の運搬，設営を行なう。

８月23日　後円部の樹木伐採，墳丘測量を開始。後円部墳頂の三角点を移設する。

８月27日　竪穴式石室盗掘坑の清掃。

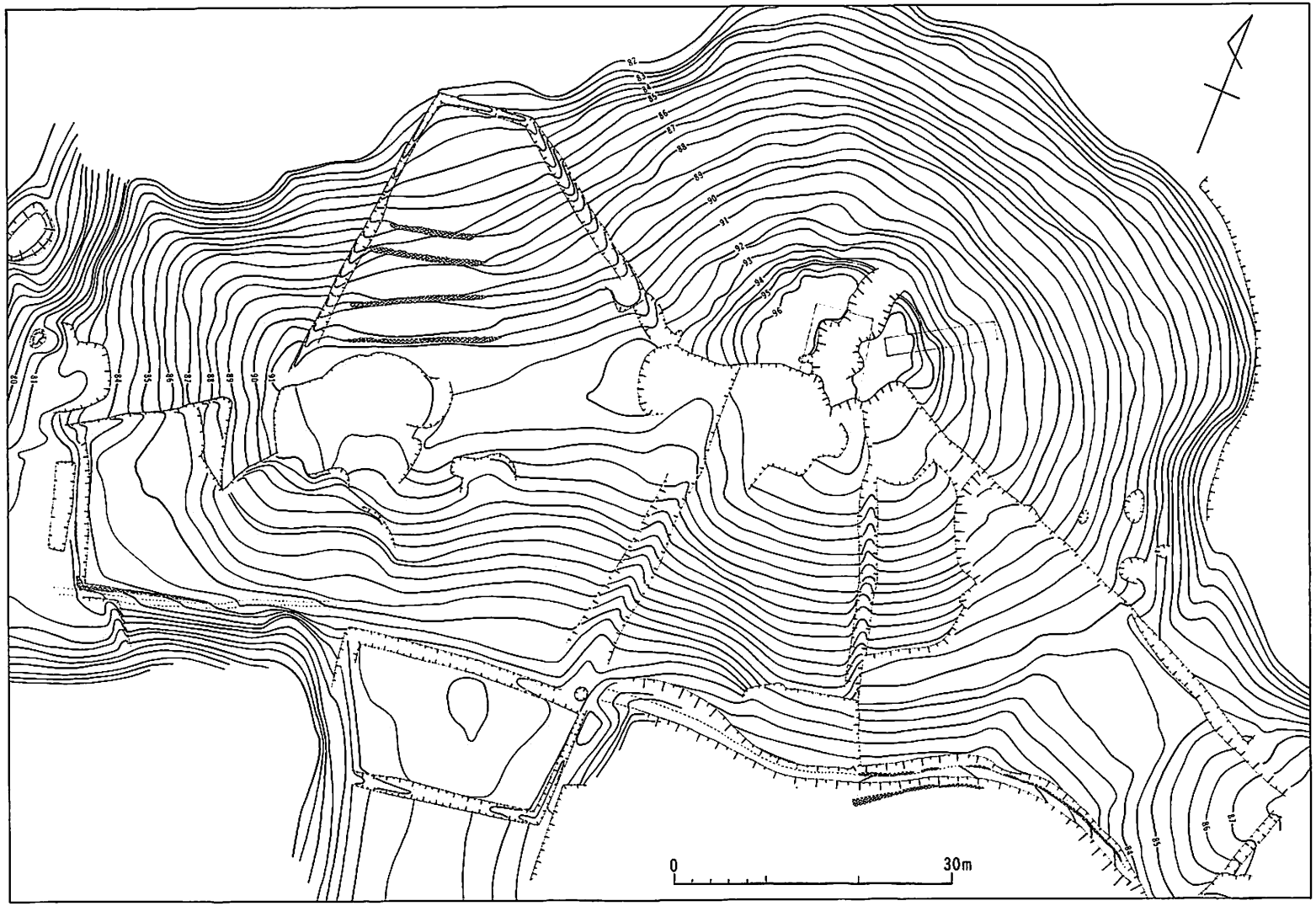
８月29日　古墳鎮魂式を行なう。後円部竪穴式石室の発掘開始。

９月８日　後円部に第Ⅰトレンチ設定。

９月23日　竪穴式石室発掘完了。竪穴式石室の写真撮影を開始。墳丘測量終了。

９月25，26日　竪穴式石室実測。第Ⅰトレンチ写真撮影，実測。

10月４日　総ての作業を終了。現場撤収。



第3図 平尾城山古墳墳丘測量図

第４図　平尾城山古墳後円部（前方部から）

3　立地と墳丘（第１図～第５図）

古墳は木津川東岸の丘陵上に築かれた前方後円墳である。この丘陵端には現在稲荷社の祀られている円墳があり，南約700mの丘陵には同様に尾根を利用した椿井大塚山古墳がある。

また北約800mには弥生の集落と推定される涌出宮遺跡がある。 古墳の位置する丘陵は標高473.3mの三上山から西に延びる尾根の一つで，この尾根は先端近くで軽く南西を向いている。墳丘はこの屈曲部分で稜線を切断して築造されている。地形測量の結果，84.5mの等高線は尾根の奥に続くが，85m等高線は墳丘を廻っている。墳丘の南側は筍籔の開墾で大きく削られており，北側もくびれ部から前方部にかけて開墾により原形を損っている。しかし後円部北側と前方部北西側は良く原形を留めていると思われる。これにより墳丘を復元すると，ほぼ85m等高線を基底として，全長約110m，後円部径約70m，高さ約11.5m，前方部幅約38m，高さ約6.8mとなり，主軸の方位はN67°48′Eである。等高線を観察すると，後円部では88mと91mのあたりにせまい平坦部がある。前方部ではあまりはっきりしないが87.5mあたりにやや平坦な部分が認められる。

第５図　発掘前の祭礼

これにより，後円部は三段，前方部は二段の築成であ

第6図　後円部葺石と埴輪列（東から）

ったと推定される。

（植山　茂）

4　竪穴式石室の調査

（表紙・第7図～第9図）

後円部の墳頂は大規模な盗掘を受けており石室壁体および裏込めの石材が，墳頂部一帯に散乱していた。さらに，墳頂の南側は筍籔の土入れのために大きく抉りとられていた。

この南側の断面を観察すると，竪穴式石室が一つ，そのすぐ西側に二つの粘土槨が認められた。今回は，このうち竪穴式石室の調査を行った。

調査は，まず盗掘坑の清掃から行った。盗掘はかなり徹底して行われており，中央の粘土床では地山まで掘りぬいているところもあった。したがって，石室の壁体についてはまったく原位置を留めておらず，粘土床も北半の撹乱がはげしかった。しかし南半では比較的残りが良く，遺物についても鉄鏃など原位置を留めるものが検出されている。

石室は，地山に約1.5mの盛り土を行い，その後2m以上掘り下げてほぼ隅丸方形の墓坑を作っている。幅は中央付近で約5.5m，長さは南端を欠くので不明であるが，11m～12mほどのものであったと推定される。掘り方の傾斜は約50°であった。

粘土床は北半がかなり撹乱されていたが，規模は知ることができた。それによれば，全長は約7.5m，幅は中央で約1.7mであった。粘土床の両肩の幅（木棺の外径）は約75cmであった。肩

から床までの深さは約30cmで，粘土床床面の厚さは15cmである。床面は南半では保存状態が良好で，木棺の木質が一部残存しており，また朱が顕著に認められた。

粘土床は北側が高く，南に向ってやや勾配をつけており，南端では粘土を立ち上がらせることなく，そのまま排水施設に続く。

排水施設は粘土床の南端から，主軸にほぼ45°の角度で，南東方向にのびている。最下部に10～15cmほどの礫を縦長に整然と配列し，その上に同様の礫をつめ込んだものである。最下部に敷きつめられた礫の上面には，朱の付着が顕著であった。なお，この排水施設は，ほぼ1mのところで，筍籔の土取りのために破壊されており，末端の状況を知ることはできなかった。

石室の壁体は石英粗面岩[註①]を用いていたが，すでに述べたように，最下部まで完全に破壊されていた。裏込めの石材は，主として，10cm程度の礫を用い，要所に30～50cmほどの大型の礫を用いて補強をはかっている。北側の掘り方確認のために，裏込めの石をトレンチ状に除去したが，粘土床の北端から約70cm北方で，径18cm，深さ約50cmの柱穴を確認した。粘土床の周囲にさらに広がりを持つものかとも推測されたが，今回の調査ではこれ以上掘り拡げなかった。埋葬の儀式に伴うものであろうか。なお，石室の主軸は，墳丘の主軸と概ね直交し，ほぼ真北をさし示していた。　（寺島孝一）

註

① 石材の鑑定は、滋賀大学の都出比呂志氏を介し、京都大学地質鉱物学教室清水大吉郎氏と京都大学の清水芳裕氏の御教示をいただいた。

第7図　平尾城山古墳竪穴式石室（西から）

第８図　平尾城山古墳竪穴式石室（北から）

第９図　平尾城山古墳粘土床断面（北から）

5　遺物の出土状況

（第10図・第11図）

粘土床も竪穴式石室同様に撹乱を受けていたが南半部はかなり良好に原状をとどめていた。南半約４ｍの全面にわたって朱が認められ，南半部中央には木棺の木質が一部残存し，鉄片，石釧，鉄鏃，鉄剣，鉄鉇，鉄鑿などが原位置に近い状態で発見された。

鏡は，粘土床南端から約２ｍ北側の棺材の一部と思われる木質上より鏡面を上にして出土した。細片であり，撹乱時の作用を受けているものとみられる。

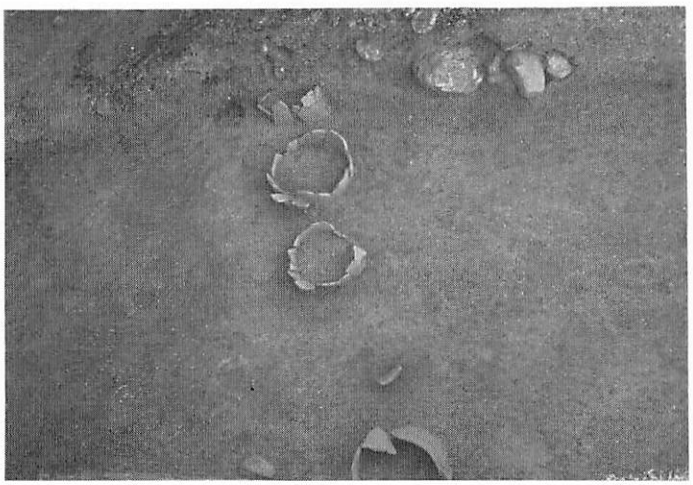
石釧は，粘土床南端より約３ｍ北側の粘土床中央部に集中して認められ，完形品２点を含む数個体分の破片が検出されている。

この石釧群の西側の粘土床肩部に１個体分の鉄剣が置かれていた。鉄剣はこのほか破片３点が粘土床南部東側において検出され，その出土状況からすれば，本来粘土床東肩部に置かれていたものと推測される。

鉄鏃は粘土床より19本出土しており，それらの大半は先端を北に向けて粘土床南部に集中してみられた。この南部に位置するものは，粘土床の東側と西側の少なくとも２群にわけて置かれたものとみなされる。これら南部に位置するグループのほかに，鏡片の出土位置の粘土床東西両肩にも１本ずつ認められ，この部分が撹乱を受けていることからすれば，両肩部にも何本かの鉄鏃がまとまって置かれていたものと推測される。ところで，粘土床南部西側に位置する８本のグルー

第10図　石釧出土状態（西から）

第11図　鉄鏃出土状態（東から）



第12図　埴輪出土状態（北から）

プは，いずれも鑿頭式でそのうち4本が先端を北にそろえて並置されており，茎には矢柄の痕跡が認められる。粘土床南端には排水施設が造られており，この間の距離は約60cmをはかる。これらの鉄鏃が原位置を動いていないものとすれば，矢柄の長さとともにそれらの埋置法など若干の問題を含むものといえよう。

鉄鉇と鉄鑿は，これら粘土床南部に位置する鉄鏃の東西両グループから各々に出土している。

石室全体が後世の撹乱を受けているため，本来の副葬遺物の種類や点数およびそれらの埋置状態の詳細は定かでないが，少なくとも鉄鏃をはじめとする鉄製武器・工具類が，粘土床南部に集中して置かれた傾向は指摘し得るであろう。粘土床のレベルは北から南へかけて緩やかな傾斜をもって下がっていることや，かつて出土した鏡類が粘土床北半部に存在した可能性が強いことを重視すれば，遺骸は中央ないしやや北寄りに頭部を北に向けて埋葬されていたことが推定される。こうした遺骸の位置に対する鉄製武器・工具類の副葬位置は，鉄鏃のうち鑿頭式のものが90%以上の比率を占めることや長大な粘土床を有することなどとともに，本古墳の性格の一端を示すものといえるであろう。（乗安和二三）

6　金属製品（第13図～第20図）

鏡：径約3cmほどの細片で，内区の一部。仿製三角縁三神三獣鏡ないしは三神五獣鏡と推定される。粘土床南部木棺内より出土した。

鉄剣：いずれも破片で，約10個体分検出された。長さは明らかではないが，身幅は3cm前後のもので，なかには茎をもち木質の銹着しているものも認められる。粘土床中央部西肩の一個体を除き，大半は粘土床南部東肩に置かれていたものと推測される。

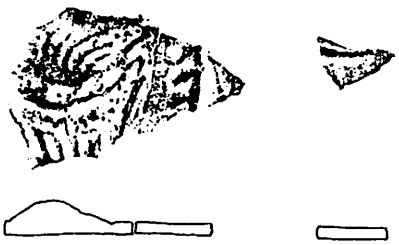
鉄鏃：副葬品の中で最も数が多く，粘土床より19本，撹乱土中より14本検出された。これらは，いわゆる定角式と称されるもの2例を除き，他はすべて鑿頭式と呼ばれるものである。身の長さ約3.3～4cm，身幅約1.5cm，厚さ約0.5～1cmで，長さ約2cmの茎をもつ。これらの大半は，粘土床南部よりまとまって出土したものである。

鉄斧：全長8.5cm，刃幅4cmの小型の有銎式のもので，基部から刃部へかけてやや広がる形状を呈す。後円部斜面の二次堆積土中より出土した。

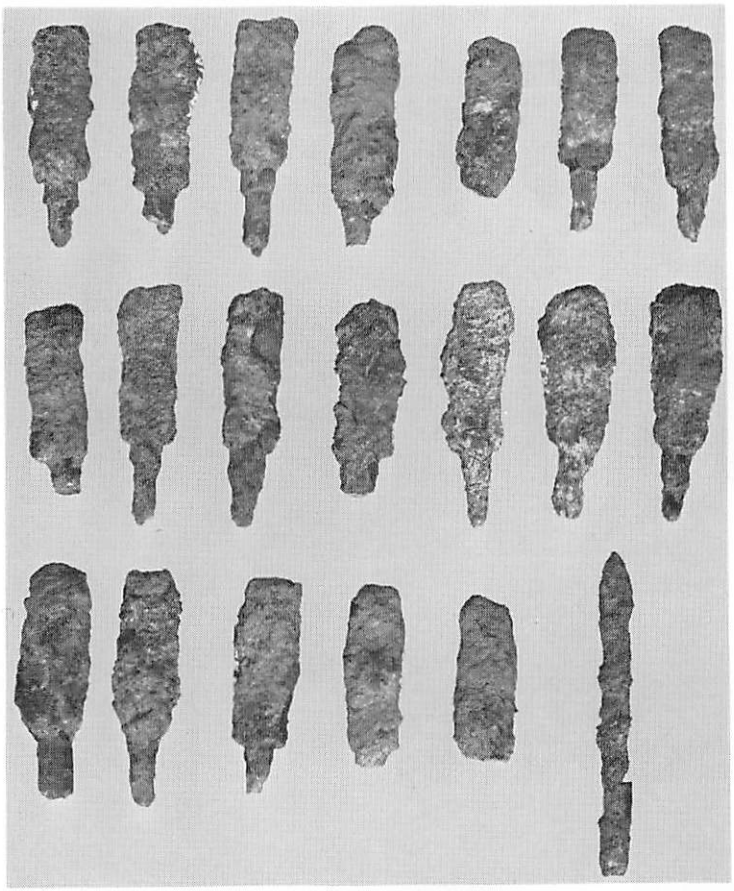
鉄鉇：鉇ないしは鉇と推測される破片が6個体分出土している。いずれも幅約0.6cm程度の小型のもので，木質をよく残すものもみられる。大半が粘土床南部で出土している。

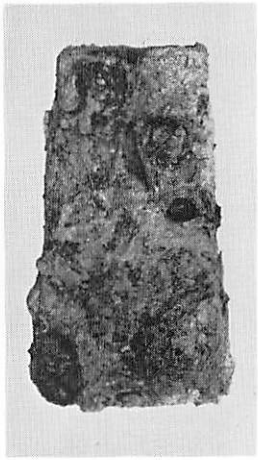
鉄鑿：破片ばかりで7個体分出土している。身の長さ約7cm，幅約0.5cmの小型のものである。大半が鉄鏃や鉇と一緒に粘土床南部で検出されている。

（乗安和二三）



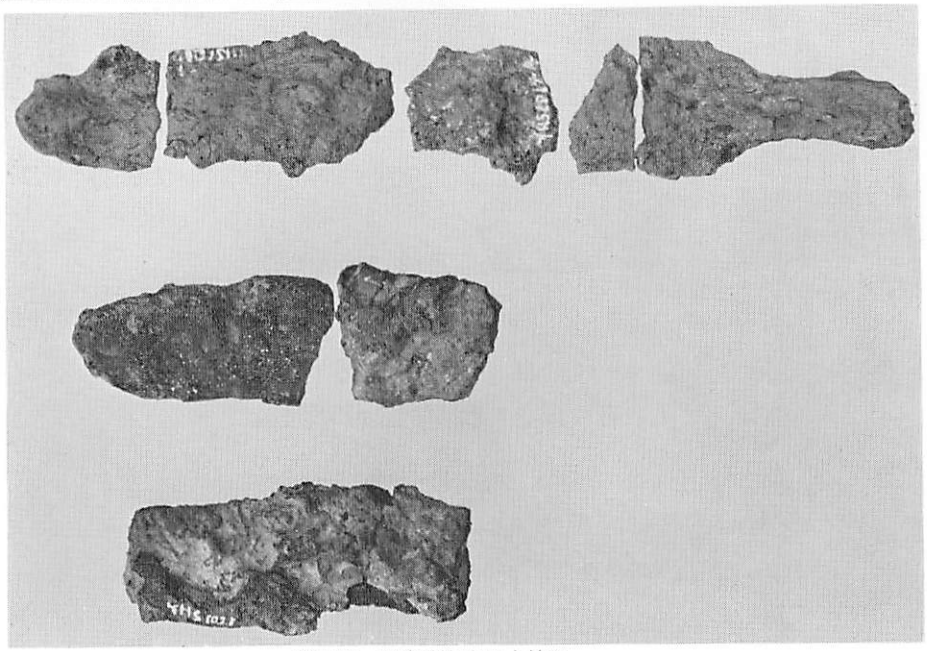
第13図　鏡片拓本



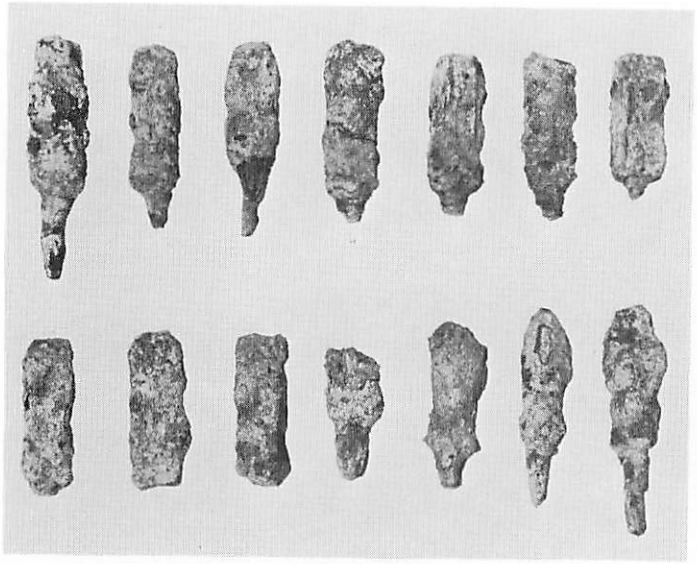


第16図　後円部出土鉄斧

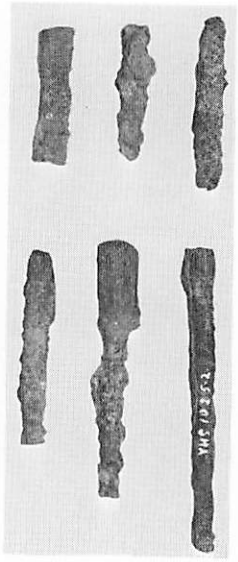
第14図　竪穴式石室出土
鉄鏃・鉄鉇



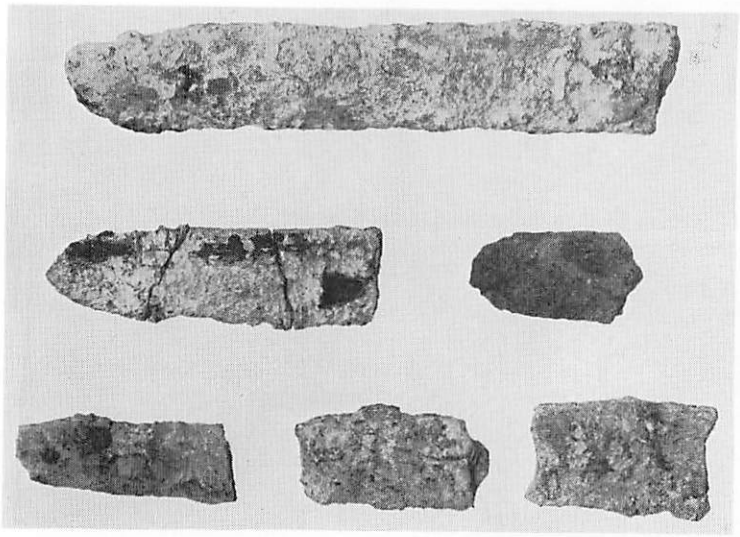
第15図　竪穴式石室出土鉄剣



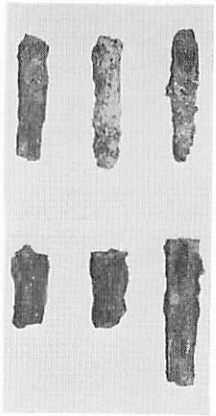
第17図　竪穴式石室出土鉄鏃



第19図　竪穴式石室出土鉄器



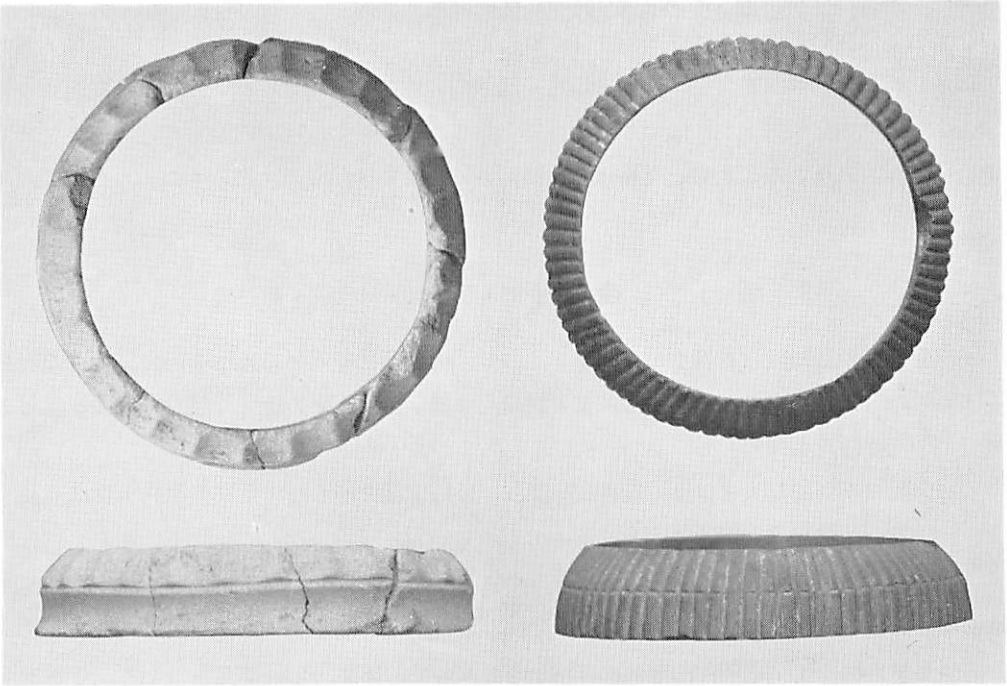
第18図　竪穴式石室出土鉄剣



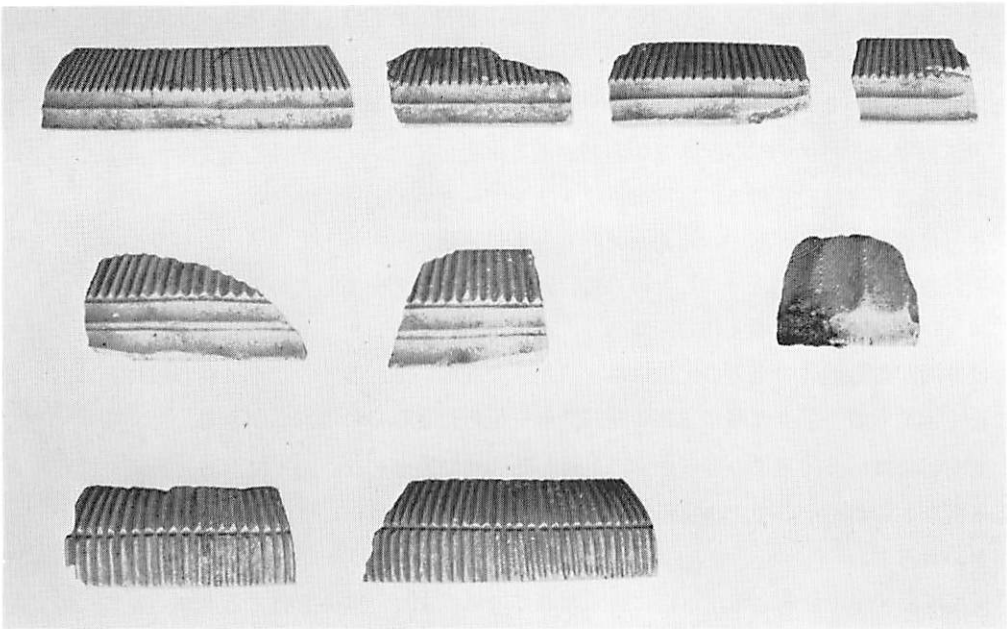
第20図　竪穴式石室出土鉄器

7　石　　釧（第21図・第22図）

竪穴式石室中央部の粘土床南半分の木棺跡からは，第21図，第22図の石釧が出土している。第21図左側は，木棺跡床面から出土した８片の石釧破片を接合したもので，完形品である。直径7.4cm，高さ1.4cmで，上半の斜面には波状の面取りをし，中央に横方向の刻線が施され，下半分はU字形に凹んだ太い溝が一周する。下面，内面は平らである。右側の釧は直径７cm，高さ1.4cmの完形品である。細かい刻線を二段に放射状に施こし，中央に横方向の刻線を一周さ



第21図　竪穴式石室出土石釧



第22図　竪穴式石室出土石釧

せる。下面，内面は平らである。第22図は，上段の4つ，中央左の2つ，中央右の1つ，下段の2つの4種類の石釧である。今回発見された石釧には，形態と文様によって，第21図と第22図に示した6種類が存在する。明治36年に平尾城山古墳から発見された石釧は，現在，東京大学人類学研究室に所蔵され，この中には今回発見されなかった他種の石釧も存在し，平尾城山古墳に副葬された石釧の形態と文様は，7種類あるいは8種類以上になるものと思われる。

（飯島武次）

8　埴　　輪（第6図・第12図・第23図～第25図）

後円部の東斜面に設けた幅2mのトレンチ内で，墳頂肩部を円形にめぐる円筒埴輪列の一部を確認し，また墓坑内の流土中から多量の埴輪片を検出した。その他，くびれ部北側をはじめ墳丘の各所で破片を採集した。

普通円筒の平均的な大きさは，底径30～35cm，口縁部幅2～5cm，中間段幅16～18cm，最下段幅20～23cmをはかる。口縁部は幅が極端に狭く，外反する。段数はおそらく5段と思われる。朝顔形円筒埴輪は，普通円筒より底径が小さく，22～26cmを計り，頸径17cm前後，口径36cm前後を計る。口縁部はあまり開かず，肩部は球形の丸みをもつ。

円筒埴輪の製作は，幅約12cmの二枚の粘土帯をもって，まず円形の基部をつくる。その際，一方の帯を他方の内側におしつけて接合する。そうして，その上に反時計回りに粘土紐を巻きあげる。口縁部に至るまでに途中幾度か巻きあげを停止し，そのつど巻きあげ部の内外面を調整したのちタガをつける。

外面調整は，タガをつける前のタテハケによる調整でとどまるものと，タガをつけたのち，さらにタガ間をナデあるいはタテハケで再調整したものとがある。ヨコハケを用いたものはきわめて少ない。そのほか，底部付近の外面にヨコケズリを施したものがある。

内面調整は，ハケ・ナデ・ケズリの各種がある。ケズリは，円筒埴輪を倒立して施している。施す部分は下部に限られる。方向はタテ・ナナメ・ヨコがある。

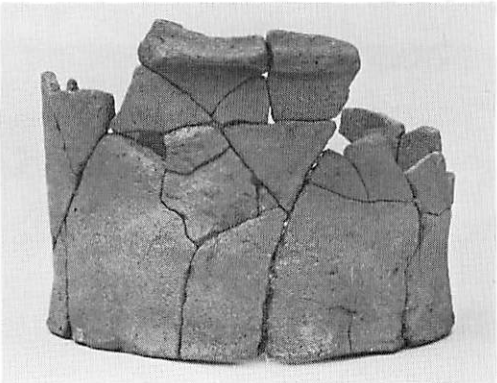
タガは総じて突出が高い。断面形でみると上辺・側辺が内彎している。タガをつけるまえに器壁に方形の刺突を加え，つけたのち時計回りのヨコナデを施している。

スカシ孔は，逆三角形と長方形があり，前者が多い。三角形もあったようである。孔の大きさは差異がある。孔の全体の配置はあきらかにできないが，破片のなかに，各段に孔があったことを示すものや，タガ間に三個の逆三角形を配したとみられるものがある。

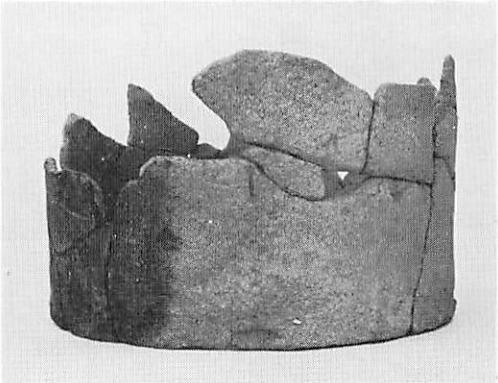
形象埴輪は，後円頂部の各所から，遊離した状態で出土した。細片であるため多くは種類さえ不明であるが，その中で，家形埴輪の存在は疑いない。また，楕円形の合子形埴輪とおぼしきものがある。

円筒埴輪・形象埴輪とも，外面に塗朱されている。また，黒斑を有する点からみて，焼成方法は窖窯によらない野焼きであったと推測される。

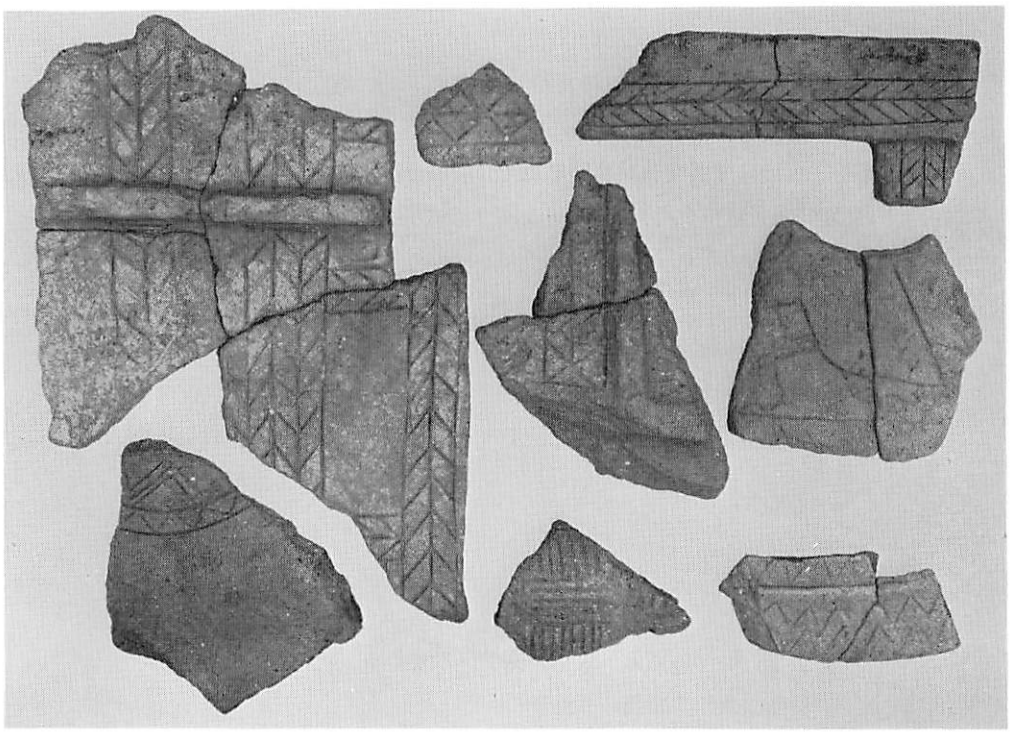
埴輪のほか，後円頂西区から土師器片を採集した。そのなかに布留式と思われる破片があ



第23図　円筒埴輪



第24図　円筒埴輪



第25図　家形埴輪

る。また，羽釜・陶磁器・瓦片が後円部から，弥生時代後期の土器片が封土中から出土している。

円筒埴輪の外面調整・タガ・スカシ・ならびに朝顔形円筒埴輪の肩部の形態からすれば古墳の時期は，私案による埴輪編年の第Ⅰ期に該当する。実年代でいえば，四世紀中葉に比定できる。

（川西宏幸）

謝　　辞

発掘調査に際しては，財団法人高梨学術奨励基金の援助を受け，京都府教育委員会文化財保護課，山城町教育委員会の関係者各位および地元の方々などに多くの御協力をいただいた。以下に銘記して（敬称略）謝意を表する次第である。

財団法人高梨学術奨励基金

高梨仁三郎（理事長）

京都府教育委員会文化財保護課

堤圭三郎（記念物係長），平良泰久，高橋美久二

山　城　町

柳沢　保（町長），梶浦亮宏（教育長），西岡保治

地元各位

中津川保一（山城町埋蔵文化財専門委員），福島忠雄（土地所有者），竹中俊一（土地所有者），田畑芳男（土地所有者），森岡萬太郎（土地所有者），西嶋美治，中野庄蔵

第26図　高梨仁三郎氏の発掘現場視察

発掘参加者

調査主体者	平安博物館館長	角田　文衛
調査担当者	平安博物館考古学第三研究室	近藤　喬一
調　査　員	平安博物館考古学第三研究室	飯島　武次
	同	寺島　孝一
	同	乘安和二三
	同	植山　　茂
補　助　員	京都大学　川西　宏幸	
	広島大学　菅本　宏明，藤野　次史	
	早稲田大学　車崎　正彦	
	駒沢大学　荻野　繁春	

京都府相楽郡山城町
平尾城山古墳第1次発掘調査概報

発行日　昭和52年6月30日
編　集　平安博物館考古学第3研究室
京都市中京区三条大路北・高倉小路西
印　刷　東洋紙業株式会社